

迫害を受けるキリスト教徒

大ローマ布教所長
山口 英雄 Hideo Yamaguchi

クリスマスが近づくと、キリスト教国であろうとなかろうと、世界のあちこちの街々にクリスマスツリーが立ち、また各種のイルミネーションが飾りつけられる。テレビでそれに関する報道を聞いたときに、世界はキリスト教一色で塗りつぶされた感じがする。

現在、民主主義国家と言われているところは「宗教の自由」「信教の自由」が保証されているはずだ。ところが世界には「宗教の自由」が認められていないところがあるようだ。その最たるものは中国だろうか。外交関係を結ぼうと努めているヴァチカンと中国はまだ外交が結べない状態だ。中国が宗教を認めていないからだ。中国に存続するカソリック教団の聖職者任命権は中国政府が持っている。ローマ法王はそれを非難しているが、一向に解決の方向に進んで行かない。まるで、11、12世紀の頃のヴァチカンと神聖ローマ帝国の関係を彷彿させるようだ。

また最近では、イスラム圏におけるキリスト教会や信者に対する一連の迫害攻撃がある。ニューヨーク同時多発テロの発生より本年でちょうど10年となる。アメリカを中心として、ヨーロッパをもテロ攻撃の対象としているのはビン・ラディンとその信奉者である。ビン・ラディンは、十字軍以降、アラビア世界を植民地として世界を治めてきたのは欧米諸国であると考え、その精神的バックボーンはキリスト教であるという。そこから、キリスト教を攻撃すれば欧米の足並みも乱れるだろうと考えているようだ。

キリスト教が最近攻撃された事件をいくつか列記したい。

- ・スーダン及びジンバブエの両国で1984年から今日まで、キリスト教徒はそれぞれ150万人以上が虐殺されている。
- ・かつてザイルだった現コンゴ民主共和国の首都キンシャサでは、少数のカソリックのデモ隊に警察が発砲。30人が死亡（1992年）。
- ・インドネシアでイスラム教徒が、カソリック教徒、プロテスタント教徒を攻撃。首都ジャカルタだけで13人死亡（1998年）。それ以降、教会は強制的に閉鎖され、伝道者には罰則が適用されるようになっている。
- ・2006年、トルコのトレビソング教会で祈祷中、サントーロ神父が暗殺される。2010年にはパドヴァーノ大司教が殺される。
- ・インドのオリッサ州でキリスト教への暴動、迫害が続出。100人以上が死亡（2009年）。
- ・バングラデシュでは、反キリスト教キャンペーンで多くの教会、信者宅が破壊される。
- ・グアテマラでは、準軍隊主義組織により伝道師やボランティアが多数死亡。
- ・キリスト教ネストリウス派の信者達が、イスラム過激派の攻撃によって、多数の犠牲者を輩出。

以上のような事件が続く中、さらに悲劇が生じた。

2010年10月31日、イラク・バグダッドのカソリック教会での聖体の秘跡の儀式中、アル・カイダの一味7人が教会に侵入。儀式中の2人の神父を殺害し、教会の入り口のところで

車を一台爆発させた。そして、数人の神父と100人余の信者を人質とした。そして、同時にテレビ、アル・バグダーヤを通して攻撃の正当性を訴え、身代金を要求した。その上、エジプト、イラクの刑務所に収容されているビン・ラディン関係の仲間を釈放しろと請求。夕方7時頃、政府軍は教会を取り囲み、周辺の道を閉鎖した。上空にはテレビカメラを搭載したアメリカ軍のヘリコプターが旋回し、政府軍が教会に突入した。20分で攻防が終わり、結局カソリック教徒が46人、政府軍の7人、テロリスト5人が死亡。けが人は75人。この教会では2004年にもテロリストの攻撃にあつていて、12人が死亡し、数十人がけがをしている。

翌11月1日、アル・カイダが事件を起こしたと発表するとともに、ヴァチカンに仲介を依頼した。もちろんヴァチカンは仲介を拒否。法王は暴力を非難し、国際的機関が仲介することを提唱した。その上、平和への希求の声を大にし、平和は神からの贈り物であると宣言。イラクのキリスト教信者は、2003年には80万人いたが、2009年には50万人に減っている。そのうちカソリック教徒は、その半分26万人である。その多くがバグダッドに住んでいる。女性の中には、キリスト教徒でありながら、迫害を受けないためにイスラムのヴェールを頭に付け、イスラム教徒のように見せかけて生活をしている人も少なくない。

2010年12月25日、ローマ法王はクリスマスのメッセージとして、世界に平和の確立と「理由なき暴力」の終焉をアピールした。しかし、そのメッセージの下、3日間小康状態を保っていたナイジェリアでは、クリスマス・イヴにキリスト教徒とイスラム教徒が衝突し、ジョス（JOS）では爆発物で32名が死亡した。教会も2カ所攻撃され、そのうち1カ所は火をつけられ炎上した。ナイジェリアでは、北部にイスラム教徒、南部にキリスト教徒が集中的に住んで生活が続いている。南北の間接地帯は「Middle Belt」と呼ばれているが、それをはさんで南北の対立がよく勃発する。2000年には国の中央部で、キリスト教徒とイスラム教徒が衝突。両者の間の犠牲者は数千人以上に上った。2004年にはやはり国の中央部で撃ち合いが生じ、数百人のイスラム教徒が亡くなっている。その反動は北のカーノに波及し、約600人のキリスト教徒が殺された。2008年にはジョスで地方選挙が原因となって紛争が起き、双方で700人ほどが亡くなっている。

さらに、2011年の新年を迎えた夜中のミサ。それはエジプト・アレキサンドラで起きたテロ事件。年の終わりの、新年のミサに1,000人余りのキリスト教のコプト信者が集まっていた。ミサが終わる真夜中の0時45分頃、教会の前に停めてあった車が大音響とともに爆発。そして、21人が死亡、79人が負傷した。その後怒ったコプトの信者が蜂起して街に出る。街でイスラム教徒と国の警察隊とが衝突。近くのイスラム寺院が被害を受ける。さらに元旦の午後には、イスラム教徒とまた衝突した。

コプト信者はエジプトやスーダンに住み、キリスト教を信じ続け、実践を通してそれらの国々に貢献してきたと自負する集

(14 頁に続く)

(8頁からの続き)

団である。7世紀までその地でのキリスト教を代表していた。しかし、イスラム教の進展とともに、イスラム教に改宗するものが相次いだ。そのために、残ったキリスト教信者は隠遁生活を余儀なくされた。16世紀にヨーロッパ人と接触してコプトとして認められ、ヨーロッパの中にもエジプト人を中心として広がっている。ローマにもコプトの教会がある。

ローマ法王は、これらの一連の出来事を大変憂慮している。元旦と2日のアンジェルス（法王のお告げの祈り）でもこれらの出来事に言及している。平和というのは具体的な目標なのだ。社会的にも政治的にも人間が実現しなければならないことだという。キリスト教徒は、平和への道を歩もうとする政府や民衆を助けていると述べている。

ローマ法王をはじめとして、イタリア政府、EUの首脳たちは、キリスト教徒が迫害を受けている国々では「信教の自由」が欠如していることを訴えている。

世界中で、憲法上「信教の自由」を認めているのが194カ国である。しかし実際には、世界の人口の70パーセントが「信教の自由」を否定されているのだ。宗教対立による犠牲者を100人すると、その75人がキリスト教徒であるという。今でもキリスト教を信じているために、世界の5,000万人のキリスト教徒が危機にさらされているという。

(4頁からの続き)

されたものも含まれている。また、天理教における上海伝道庁のようなこの地域における統括組織の施設はこの数には含まれていない。施設数の後に「駐在教師〇〇人」としたのは、「附（駐在教師）」（仏教各宗派では「附（駐在布教師）」となっている）の後に記されている人名の数。例えば、天理教の場合、駐在教師には伝道庁長をはじめとする伝道庁勤務者などの名前が記されている。なかには施設名がなく、駐在教師だけが記されている教宗派もある。尚、一部を除き人名の後に日本の地名が括弧付で書かれているが、これは戸籍地であろうか。

(3) 本稿ではこの部分の漢字表記は現代表記。明らかに誤植と思われる部分については訂正した。たとえば「2. 天理教中華教会」の「②原澤千加栄」が原文で「②原澤斗加栄」となっていたり、「6. 天理教肥和教会」の「③金子ナホ」が「③里子ナホ」、「5. 天理教揚子江教会」の「④77」が「③77」となっていたりしている。ほかにも原文の表記には誤植があるかもしれない。尚、信徒数の後の（日）は日本人、（中）は中国人を意味し、原文通りの表記である。

(次号に続く)